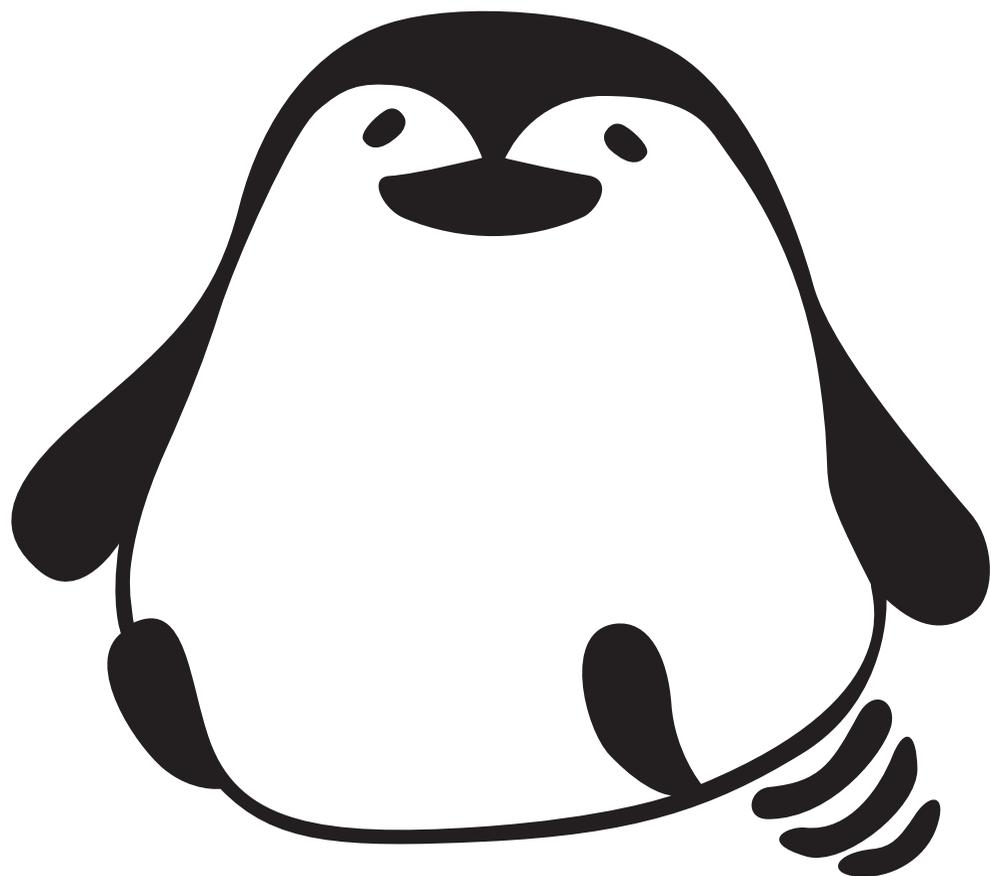


オーレロ通信 55号



もうすぐW杯です☆
最近、首が痛いです♪

忘れてしまいそうなシアワセ

いろ～んな子どもと関わるようになって、いろ～んな刺激を与えられてきました。仕事でもボランティアでも子どもと活動できるなんて、「こんなに楽しく毎日を送る人はいない！」なんて思ったりもします。たいへんシアワセなことです。ただ、もちろんいいことばかりではなく、時にはつらくなっちゃうようなこともあり、自分の姿勢を改めて問われているような気がしたり、自分の力が足りなかったからだ～！と思わずにはいられなかったり・・・人知れず(?) 苦しい時間を過ごしたりもします。こんなときには、「やはり自分はこの世界には向いていないのだ」ともがいては、「でもこれしかないかも」なんて思い直し、軌道修正をしていくのです。春から急に何もかもめまぐるしく動き出し、やっとゴールデンウィークだあとと思って、あれもこれもしたいと欲張って考えていたら、何にもしたくなくなりました。何もなくていい日が1日あれば、今の私には十分シアワセ。そして、そう思えるほど慌しく動いている自分がまたシアワセなのだ、何重にもシアワセをかみしめている今日のごとです。皆様も、心身の健康には十分ご留意くださいませ。 (5)

あとがき

★子どもを4人も殺した戸塚ヨットスクール園長が4年間の刑期を終えて出所した。子どもを殺しても、施設は存続し、それを応援する人たちがたくさんいることに驚く。刑務所内で反省するどころか、記者会見で「体罰こそ教育だ」と叫んでいる。その戸塚を支援する代表が石原都知事である。東京都民はこんな危ない知事をどうして容認しているのだろうか。

★神戸フリースクールが通学扱いに・・・須磨区の中学校が2度の調査の結果、神戸フリースクールに通うことで「通学扱いと認めます」と判断した。同時に神戸市教委の調査もあり、16年目にしてやっと公に認められることになった。感謝です。

★六甲山へ登ろう・・・ひさしぶりに5月30日六甲山に登って、高山植物園に行く予定をしていますが、一般の方もご家族のみなさんもいっしょに登りませんか？

★6月19日フリースクール全国ネットの総会があり、田辺と竹林が出席予定です。

★今年度4月から「不登校を考える親の会」が毎月第4日曜日午後2時半～4時半に変更になりました。またお茶代として200円いただくことになりました。新しい人も誘って、ぜひご参加ください。 (6)

カンパありがとうございました！

《カンパをいただいた皆様》

まきさん 屋菅さん 河本さん 山口さん 坂口さん 松下さん 清重さん 坂本さん
ふくえさん 今村さん 登尾さん 以上計11名 (順不同)

随時カンパを受付けています。郵便振込み 01120-9-81163 神戸フリースクール

H.P - WWW.FREESCHOOL.JP/KFS

MAIL - TOKASYA@HOTMAIL.COM

お問い合わせ TEL・FAX 078-366-0333

住所・兵庫県神戸市中央区下山手通8丁目8-10

※オーレロ通信の一部、または全文の無断転載を禁止します



KOBE FREE SCHOOL

不登校の生き方に 手本はない

田辺 克之

不登校をはじめると、前方になにもなく、広い荒野に投げ出されたような感がある。この道は不可解で、未知の世界である。だからおもしろい。専門家というガイドがなかったようなアドバイスをしたとしても、あくまでも予測で、その本人が自分の足で歩いてみない限り、どう展開するかは全く予測できない。たまたまガイドの説明と一致するような結果が生じたとしても、それはまぐれでしかない。不登校の生き方に手本なんてない。だから自信をもって歩けばいい。

ぼくは「不登校は天才」だと思っている。ほとんどの子どもたちが、なんの疑いもなく大人が敷いたレールを歩いてい

るのに、「ちよっと待てよ、なにかが違う」と判断できる本能的な嗅覚を持ち合わせた子どもたち。「このままだと自分の命があぶない」「このまま学校を続ければ、自分が磨り減ってしまう」と直感的に感じるフリーリングはきつと天性のものだろう。天才とか、より動物に近いといったほうがいいかもしれ

だに男社会であり、健全者優位の社会が厳然と存在している。戦争や暴力が支配した封建時代から抜け出し、お互い老若男女が対等に話し合っている。物事をきめていこうという人間らしい文化をだれもが望んだはずなのに、またぞろ野蛮な文化が盛り返ってきて、暗雲が日本社会を覆いつつある。晴れのち曇りは自然の掟だが、人間社会では、賢者たちが話し合って、むき出しの怒りを沈め、冷静に話し合える知恵をお互いが身に着けなくては、新しい時代の到来はないだろう。この時代の空気にどっぷり浸かった大人たちは、もうこの時代を変えることはできないと思う。いまこそ多くの人々が喪失してしまっ

いて考え、平和で環境にやさしいスローな文化を生み出すことができるのは、かれらを措いてないではないかと思う。

新しくなった入り口の前で

あるのでこれくらいにして
おく。

これは余談だが、僕がもし四才だったとして親に受験がしたいと、申し出て

フリースクール体験

Y. T.

僕は、小学校1年から行ったり行かなかったりして

それから、4年生からずっと行き始めて6年の2学期からまた行かなくなりました。別にいじめもないし友達もいっぱいいましたし、毎日朝になると家に迎えに来てくれてました。ただ、なんか人がいっっぱいいる所がにがてなです。人の目がすっごく気になるし。それでちよこちよこ休むうちにだんだん行きずらくなって、行かなくなりまし

た。中学に入って入学式は出ましたが、やっぱり雰囲気

がなんかいやになって、3日行って行かなくなりまし

た。

それから、中学1年生は一度も行きませんでした。2年になってお兄ちゃんとかお姉ちゃんがいるさく「早く学校行け！」って言うってくるのでつらくなりま

した。

それから、中学1年生は一度も行きませんでした。2年になってお兄ちゃんとかお姉ちゃんがいるさく「早く学校行け！」って言うってくるのでつらくなりま

した。本当は行きたいのだけれど行けないから毎日つらかったです。家にもつもらないし、みんなに言われるから気持ちも暗くなってゆきました。

私にとってフリースクールとは原点であり、出発地点でもあります。この場所に来ると不思議と癒されます。卒業してからアルバイトを転々とし、興味本位で夜の仕事にも何ヶ月間か携わりましたが、お酒の作り方と接客方法を学び、手にした札束みて、辞めれなくなりそうになる事が怖くなり、思いきって辞めました！自分にこの職業が合っていない事を身を持って経験しました。

その後、介護職に就き、現在も就任中です。社会人に成った今、卒業して年数はたったものの、どれくらい成長できたのかと思えます。

現在の仕事は、主に老人介護で食事・入浴・排泄などの介助（お手伝い）ですが、いつも孤独な生活を送っている方々や自宅での入浴が困難な方々を支援しながら働いております。この仕事と深く関わって行くにつれて色々な人との出会いがあり、別れがあり、真剣に「生・死」について考えさせられたり、「生きてる意

I LOVE KFS
by たかよ

い〜な〜、ソコ
うらら

私は、フリースクールという場所は通り抜けるもよし、留まるもよし、の広場のようなものと思つてきました。あるいは、船が寄港する港のようなものと、です。通行人や、船乗りにとっては、ある意味、ひととき、つかの間の、通りすがりの場所、でいいのだと思つていました。

もちろん十分に意味のある大事な場所には違いないのです。

でも15年という歳月を、フリースクールとともに歩んだ先生は、決してその場所を動くことなく、軸となり、それは信念ともいえる重しを抱きかかえながら、様々な子どもたちを受け入れ、送り出してきたわけで、今回の通学定期は、その継続のチカラの証なのだ、心から敬服します。素晴らしい一歩です。大きな一歩です。月面着陸に匹敵するくらい！！

絶望と一点の光。

人はもろい。たった一人の人間に、11年間私が築き上げた信頼は、いともたやすく崩されていった……。

始まりはわからない。いつのまにか見えないうちに絡みつきすべてを隠すかのように作られたくつもの仮面。かっこよく、賢く、いい子に見えるため、本当の姿を隠し、自分に嘘をついて、つらく、苦しい毎日。心の中で「楽しい？」って誰かが聞く。「全然……」「じゃあなぜ？」「だって、みんなについて行かなくちゃ置いていかれるでしょ。それに置いていかれたら相手にしてくれないかもしれないでしょ。」でも、無理している事に変わりない。そして、ゆっくりと壊れていく。まるでだんだん歯車が合わなくなくなって壊れていくおもちやのように。

そして、遊び半分で一人の人間が嘘か本当かわからないような話を作り、だれかに言わない間は瞬間に、私の知らない間に噂になり、彼はそれを喜ぶかのように次々と話を作っていた。話をやる人の数は2人3人と増えていき、よく考えれば嘘だとわかってる話も人は信じるようになった。当然その噂は私の耳にも聞こえてくるようになる。

本当におめでとうございませう。と喜ぶにはまだまだ問題はいっぱいありますが、子どもたちが大手を振って、そして、他の子どもたちにも「い〜な〜、ソコ」と羨ましがられながら、フリースクールに通う姿を願わずにはいられません。

NEVER GIVE UPの精神で、後5年、できれば10年は現役で頑張ってください。その頃の教育現場はどのようになっているのでしょうか。きっとフリースクールのあり様も変わっていくのでしょうか。

格差社会

あきら

今回は特にテーマがなかった。先日、テラと話した格差社会について自分の意見を書く事にする。

最近よく格差社会と云う言葉を聞く。この間、『朝まで生テレビ』でも、この格差社会が取り上げられていた。今、この格差社会は

現実のものになりつつあると僕は思う。それは小学生を見ればよくわかる。今年から同志社大学と立命館大学は新しく小学校を開校した。私立の小学校は、そのほとんどがエスカレーター式で入学すると、ほぼ無条件で付属の高校や大学へ進学する事ができる。教師もかなり充実しており、一クラスも十名ほどの少人数で勉強もはやく、公立の小学校とは比べものにならない。しかし、私立の小学校に入学できる子供はほんの一握りしかない。ならどういった子供が私立に入学できるのか？そんな事、簡単だ。私立の小学校に通っている子供の全てが、金持ちのお坊ちゃんなのだ。もちろん、頭が良くないけれども、私立の入学試験に合格する為には、尋常じやない量の勉強をしなければならぬ。その為には、家庭教師を雇ったり学習塾に通わせる必要がある。まあ天才なら別だが、この世の中、天才児など百人に一人ぐらいしかいないので、ほ

とんどの親は子供にこれくらいは事をしているだろう。今、私立の小学校を受験する為には最低でも、二年間勉強したとして、塾の月謝が一ヶ月二万円、その月の二十四倍で四十八万円である。とても適当な計算だが、それほど間違えた事は言っていない。入学試験を受けただけでも、これだけのお金がかかるのに、更に入学金や月々の授業料を払っていくのは、かなり大変な事である。私立の小学校に入る為には、それだけのお金がかかるという事だ。今、学歴はお金で買える時代になってきている。お金持ちの親の子供は、良い学校に行き、良い会社に就職するし、貧乏の親の子供は、そのまま高卒で就職する。そのまま高卒で就職する社会になる事だけは回避しなければならぬ。かなり極端な話になったが、せめて子供にだけは、公平に学習ができる環境にしなければならぬ。格差社会の原因はこれだけではないが、書ける文字数に限度が

り、周りは私を見てひそひそと面白そうに話す。聞こえていたのを知りながら「死ぬね」「きしょい」「居なくなればいいのに……」彼らは冗談でも、聞く方にすれば本当に怖い。「嘘だとしても周りは聞いてくれないの？なぜ信じてくれないの？」涙をこらえながら心の中で叫び続ける。教師もやめさせようとするが、本当の、彼らが納得するような答えは持っていないのだ。

私は彼らから逃げるために登校拒否をした。何もしない。起きて食べて寝るだけの毎日。時々担任が来て、なんとか学校に来させようと人の考えも聞かずみんな待っているなどともぬかす。「みんな待っているわけないじゃない。あれだけ私を嫌って苦しむ姿を見て笑っていた奴らが？もしかしたら待っているかもね。もう一度苦しむ私を見るため。」

そんな時でも楽しみは一つあった。昔から仲良かった友達からの手紙。どんなに適當でも、嬉しかった。それから勇気を出して学校に行ってみた。教室はつらいので、保健室に行くことに。1日1日は楽しくても、どこか苦しい。胸が痛い。鎖に縛られてるよう……それから少

壁一枚向こうからいつも聞こえてくる陰口。変なあだ名をつけて話すもの、私だと聞いて……「xってきばいよねえ、消えてしまえばいいのに……」。「うわ……」その声は、数少ない信じていた友達の声だった。頭が真っ白になった。

次に襲ってきたのは、絶望。涙をこらえて帰った……必死で人気の無いところに逃げ込んで泣き叫んだ。「うわああああ……」

それから月日は流れ、新しい世界……「今までの事は忘れて、新しい友達を作ろう。」と、行くものの現実はある。に甘くは無かった。今度は、人ではなく私自身に拒絶した。「人間不信」そして登校拒否。だんだん家族が心配になり「勉強大丈夫？学校行かないと後で後悔するよ。」毎日心配して言ってくるが、ストレスに言わなければならない。親がたまにこぼす愚痴。色んなことが重なり重なって、ついには家族さえ信じれなくなっていた。そんな自分自身も信じれなくなっていた。あるのは全人類への殺意と恐怖。私はこの世界を嫌った。

の脱出。自殺を考えた。あまり苦しまずに死にたいと思、色々考えた。『睡眠薬を買うためには認定書？』みたいなものが要るらしい。そして考えに考えた末リストラカットすることに。些細な事で、はさみを持ち切ろうとしたが、はさみの刃では切れなかった。「うわああああんで切れないのおお……」

滞在中、よく英語が分からない事で悩んだり、ホームシックで泣いてしまったり、1日のなかで気分が浮き沈みが激しくてよくKFSのホームページの掲示板に愚痴や悩みを書き込んでいました。

でも一緒に空港まで行った女の子もおんなじような苦労をしている事が分かって、自分だけが苦しいんじゃないと頑張れました。

滞在中、語学学校の帰りのバスに乗っている時に見かけて今も心に残っている光景があるので、紹介します。

バスの中に、車椅子に乗っていて知的障害があるとと思われる男性が来たけれど彼はバスに乗ろうとせず、しばらく動かさないで何か困っている様子の時に運転手が気さくに声をかけて、その男性に行きたい方向を聞いた。男性が地図を取り出すと運転席に座っていた。運転手は男性のところへ行き、丁寧に道を教えてました。そして「じゃあまたね。」と、運転手は男性に對して、知り合いだろうか

と思うくらい気さくに声をかけて、道を教えているのを見て素敵な方だと思いました。

NZの人たちはみんなそういう感じで、学校の帰りや2回道に迷ってしまった時、通りすがりの人に拙い英語で道を聞くと親切に道を教えてくれたり、中にはステイ先まで車で送ってくれた方達もいて、NZは温かい心を持った人がたくさんいる国だと思いました。

帰国日の前日、学校も最終日で明日帰るのかと寂しい気持ちで帰宅途中、信号がなくて交通量が多い通りを横切ろうとしたら、左から来た車にひかれそうになりました。転んで頭の中が真っ白になってしまったので運転手に大丈夫と聞かれても上手く答える事ができず、とても怖かったけれど今、生きていられる事の大切さを噛みしめる出来事となりました。

そして10月8日に帰国しました。(つづく)

ニージーランドへの道

やぶきまり

(※前号からの続き)

初めて行く名古屋の空港で、初対面の女の子とオークランドの空港に行く事も心底不安でしたが、その女の子はとても優しい子で仲良くなれて、オークランドの空港で別れました。

担当の現地スタッフの男性は個性的な方で、初対面で「19歳の時に日本を歩いて旅をした。」と話してくれました。彼みたいな人と出会ったのは初めてだったので、衝撃的でした。

語学学校には日本人の力

ウンセラの女性がいて、帰りのバスに2回も乗り損ねたり、おにぎりを作ってもらったりと何かとお世話になりました。

ホームステイ先には15歳の娘さんと他の国からの留学生が2人いました。そしてホストはいろいろと気を遣ってくれたり、共働きで忙しいのに休日はいろいろな所へ連れて行ってくれるました。

語学学校のクラスでは私以外が全員韓国人(他のクラスには日本人が2人いました。)でその事も1つの原因になって、嫌な思いをした事もありました。(今は解決していません。)

授業はプリントを使った学習がほとんどで、他には数学や理科、NZ史の体験学習のようなこともやりました。1ヶ月に1度の大きなテストがあったり、毎週金曜日にはアクティビティの時間という事で、絵を描いたり映画を観たり少し遠出をしたりと、楽しかったです。

- 考える種 (10) - 大石寿子

沈丁花が匂い、すみれが咲き、桜が…という季節になると、寒い間ほったらかしにしていた小さな庭で、ちまちまと草花を触りたくくなります。株わけしたり、新しく苗を買ってきて、植えたり、思いがけなく、こぼれ種から芽を出したハーブが育っているのを見付けて、なんか得した気分になったり、ウキウキして、時間のたつのも忘れず。私の育った家は神戸の下町に在りながら、裏に広い畑があった。——その頃は空き地や原っぱもまわりにはいっぱいあった。——「庭」とは言わず「ウラ」とか「畑」とか言っていて、フリースクールの畑と雰囲気がとてもよく似てる場所で、片隅には大工だった祖父の仕事小屋があったり、洗濯物を干す所や、すべり台、プランコ、池、いろんなものがいっしょくたになった中に、祖母が植えたらしい野菜やお花がいっぱいだった。その場所は私が中学に入る頃、父の印刷工場になり、家の台所から見える所だけ坪庭のように残されて、私の母はその家を離れ、マンションに移るまで、たくさんの花を一年中咲かせ続けた。

こうして、あたりまえのように草花や木々に囲まれて育ってきたために、それらの存在は私の中に自然とすり込まれたのだろう。その頃は草花の世話を手伝う事もなかった私なのに、身近に植物がないとどうも落ち着かなくて、切り花でも観葉植物でも置くとやすらぐ。本選にもその傾向があって、「庭」が題名に入っている小説(「裏庭」「秘密の庭」といった)を読むのはもちろんの事、自分でする能力も根気もないから、広田静子さんのハーブガーデンやターシャ・チューダーさんのイングリッシュガーデンの本を見て、その庭の匂いまで感じて幸せにさせてもらっている。子どもの事を思うと苦しくて気持ちが落ち込んだ事もあったけれど、落ち込む事にも根気のなかった私は結構早く見切りをつけて、まずはいろんな楽しみを見つけて、自分を充実させて、心の風通しをよくしている方が自分にとって子どもにとってもいいのではないかなどと自分本位に考えてやってきました。こんなワガママな母親に育てられて、私のこども達は、はたしてどう思っているのだから…やさしい子ども達はきっとしかたがないと、ありのままの私を受け入れてくれているのでしょうか。その彼らの中にもきっとこの「植物と共に過ごす幸せ」はDNAに組み込まれているのは確実です。わざわざ教えたり、方向づけしなくても自然な流れの中で、私のいろんな想いが子ども達に伝わり残っていけばしあわせだなあと思っています。